

ヤスパース哲学と同時代の哲学

——フッサール，リッケルト批判にみるヤスパース哲学の独創的意義——

梶 井 靖 之

I は じ め に

前々稿「カール・ヤスパースの思想的・学問的軌跡」¹⁾において我々はカール・ヤスパース（Karl Jaspers, 1883-1969）の学的歩みについて考察し，精神医学研究から哲学研究へという全く異なった学問領域への転じの中に彼の研究者としての独自性を見て取った。そしてさらに前稿「カール・ヤスパースと人間学的構想」²⁾においては，ヤスパースが人間学的構想に基づき何よりもまず人間存在解明に徹するという，精神医学から全く異なる分野，哲学へと転じてその解明をさらに深めざるを得なかったところに初めから身を置いていたことを見て取った。確かに難病を抱えた彼にとってその転じとは，最初は精神医学研究者への道が閉ざされる一方で哲学研究者への道が新たに開かれた故の消極的で受動的なものであった。だが我々は，その一方で彼の歩み全体が実は人間存在解明を目指す人間学的構想によって貫かれていたことを彼の自伝から見出した。その観点に立つ時，一見研究上はなんの脈絡もないかに思われた医学から哲学への転じが，彼の研究過程においてはその構想をさらに深める誠に意義深いものであり，転じ後の素晴らしい哲学的成果も転じ前の精神医学研究とは無縁ではないと想定するまでにいたった。彼においては，研究上その構想は，

1) 梶井靖之「カール・ヤスパースの思想的・学問的軌跡」『経済論叢』第175巻第5・6号，2005年5・6月。

2) 梶井靖之「カール・ヤスパースと人間学的構想」『経済論叢』第176巻第5・6号，2005年11・12月。

精神医学者から哲学者へという全く別分野への転身にもかかわらず捨てられたり変更されることなく、むしろそれはさらに生かされますます優れた研究を為さしめていくこととなったのだ。その意味において彼は、精神医学、および哲学という二つの学問領域において全く無縁に優れた研究を為し遂げた「精神医学者兼哲学者」ではない。むしろ彼は、独自に人間学的構想に立ち人間存在の解明を探究し続け前期の精神医学研究から中期、後期の哲学研究へと専門領域を広げるにいたった「精神医学的哲学者」であったことが明らかとなった。我々は以上のように、前期ヤスパース（精神医学研究時代）に注目することにおいて実存哲学者として名高いヤスパースへの理解を改めて深めることができた。

しかも前稿で考察したように、その人間学的構想の哲学的発展には、ヤスパースと研究施設を同じくするハイデルベルク大学精神科クリニック（以下、クリニック）主任教授ニッスル（Franz Nissl, 1860-1919）や同僚の精神医学者グルーレ（Hans Walter Gruhle, 1880-1958）との精神医学上の切磋琢磨が大いに役立ったことも見逃せなかった。ハイデルベルク学派の伝統を守り第一線で機械論的医学の立場に立ち活躍している彼らと議論を戦わせる中でこそ、彼は一人人間学的構想の下にあって科学の限界と哲学の必要性をそこで明確に嗅ぎ取ることができたからであった。またさらには、彼の精神医学者から哲学者への転身をハイデルベルク大学において積極的に後押ししたのは、哲学者よりもむしろその精神医学者ニッスルや社会学者ヴェーバー（Max Weber, 1864-1920）であったことも興味深かった。そこには、哲学者ではないが彼同様人間研究を学際的な視点も視野に入れて為させざるを得ないと痛感していた同時代人の彼らこそが、彼にある人間学的構想に基づく哲学的萌芽を見抜き人間存在を哲学的に探求するその研究の現代的意義と重要性を深く理解していたという事情があったであろう。同時代にある学者らとの対峙と支持との狭間でこそ、初めて彼は自らの人間学的構想を次第に練り上げ哲学者へと転身し自らに独自の哲学を我がものとする道を開いたのであった。

しかし人間学的構想の下にあるヤスパースに示唆を与え、結果的に彼を独自

の哲学構築へと導き集中させるにいたった学者は彼らだけではなかった。すなわち二つに大別して、前稿で考察し今もまた触れた精神医学者ニッスル、グルーレと社会学者ヴェーバーが、機械論的医学や社会学といったそれぞれの専門分野において人間を研究対象とする中で、彼に多くの示唆を与え、科学の限界と哲学の必要性を自覚させた教師であった一方、現象学者フッサール (Edmund Husserl, 1859-1938) らや新カント派リッケルト (Heinrich Rickert, 1863-1936) は、彼にとっては自分自身の置かれた時代から哲学することのない欺瞞に満ちた哲学を構築する反面教師として立ちはだかったのだ。ニッスルらが、医学における機械論的な人間存在解明の教師として、彼にかえて自然科学におけるそれへの限界を示唆するとともに、ヴェーバーが、社会科学の分野での人間存在解明の可能性を示唆し、人間学的構想の立場にある彼は、自問自答の中で専門を異にする哲学へと踏み込んで行くこととなった。その一方で彼は、フッサールらに、時代が要請し自らに危急のものである人間存在解明へと集中しない空しい哲学を見出し、人間学的構想に立った独自の哲学構築へと集中していくのであった。だからこそ彼においては、教師としての同時代の医学者、社会学者に対する一見過大な評価と、反面教師としての同時代の哲学者に対する一見乱暴な批判とが可能であった。彼の自らにある哲学観を規準にした彼らに対する独創的な評価を考察することにおいてこそ、彼が独自に人間学的構想に立ち哲学をどのように捉え、どういった哲学観に立っていたかが浮き彫りにされよう。したがって本稿においては、教師としてのヴェーバー、さらには反面教師としての現象学者フッサールらや新カント派リッケルトを彼がどのように評価していたのかを彼の自伝から考察し、彼が考えるところの哲学とはどのようなものかを明らかにしてみたい。

II ヴェーバーの影響

前稿で考察したように1909年ヤスパースは、社会学者ヴェーバーとの運命的出会いを経験する。すなわち彼は、クリニックの同僚グルーレがクリニックに

て催した会合において初めてヴェーバーと顔を合わせた³⁾。その後彼は、ヴェーバー宅の面会日に何度も足を運んだが、そこでヴェーバーと積極的に論議を交わすこともなく静かに尊敬の念から聞き入っていた⁴⁾。そして1919年10月に『世界観の心理学』(*Psychologie der Weltanschauungen*)⁵⁾を出版して以降、彼がヴェーバーに会ったのは、ヴェーバーがミュンヘンの自宅からわざわざハイデルベルクにあるヤスパース宅を訪れ、長時間会話を楽しんだ時の一度きりであった。その際ヴェーバーは、別れ際に初めてこの書にふれて力強く彼に、「きみ、どうもありがとう。おかげで、たいへんにためになりました。今後の著作活動を期待しておりますよ」⁶⁾と声をかけた。しかしその時のこの言葉が、二人にとってこの世での最後の言葉となり、その後二人は二度と会う機会もないままに、1920年ヴェーバーは他界してしまった。このヴェーバーの死は、彼にとって学問における「哲学者ヴェーバー」の存在の大きさを改めて実感させ、世界が一変したかのように打ちのめされる出来事であった。

ヤスパースが社会学者ヴェーバーを哲学者と見なすことは一見滑稽である。しかしここにこそヤスパースにおける哲学観、哲学者観がよく表されている。つまり彼は、「社会学とは何か」という問題は「哲学とは何か」という問題と同様に明瞭ではないとする。そして彼は、「ギリシア人の『汝自らを知れ』からヘーゲルに至るまで、哲学は常に人間精神の自己認識と解されてきました。このような自己認識をこそ社会学もまた高度に欲するのであり、社会学は、現在の世界における自己認識が取り入れようとしている学問的形態なのであります」⁷⁾

3) Hans Saner, *Jaspers*, Hamburg, Rowohlt Taschenbuch, 1970, S. 33. (重田英世訳『ヤスパース』理想社, 1973年, 39ページ)。以下, J と略記。

Karl Jaspers, (Serie Piper 150) *Philosophische Autobiographie*, 2. Aufl., München, R. Piper & Co. Verlag, 1977, 1984, S. 34. (重田英世訳『ヤスパース選集14』哲学的自伝』理想社, 1965年, 46ページ)。以下, PA と略記。

4) J, S. 34. 邦訳40ページ。

5) Karl Jaspers, *Psychologie der Weltanschauungen*, Berlin・Göttingen・Heidelberg, Springer-Verlag, 1919. (重田英世訳『世界観の心理学』創文社, 1997年)。

6) PA, S. 34. 邦訳47ページ。

7) Karl Jaspers, *Rechenschaft und Ausblick*, München, R. Piper & Co. Verlag, 1951, S. 11. /

と言い、一見全く異なる学問分野である社会学と哲学とに独自に共通性を見出す。ここで言われる「人間精神の自己認識」という彼の哲学観は、やはり哲学を人間存在解明に特化している観が否めず興味深い。彼が独自の人間学的構想に基づく哲学観に立つが故に、社会学と言えども人間とは何かを解明する学として哲学と解されうると言えよう。

さらにヤスパースは、ヴェーバーの研究内容が断片的であることに目を向ける。ヴェーバーは「自分にとって是非必要な一つの領域をそのつどつかみ取りはしましたが、それを概観して自分に必要なことをしてしまうと、激しい勢いで前進していくその研究のために、そうした領域はそのままにうち捨てられた⁸⁾」と言い、それはヴェーバーの「哲学的な実存のうちにその深い根柢をもつ⁹⁾」ものであると言う。またさらにヤスパースは、ヴェーバーの「宗教社会学的研究の一切が関係づけられうる中心問題は、なぜ私たちはここヨーロッパにおいて資本主義を所有しているのか、という問題であります。この問いは、すぐれた意味において現在の実存を把握しようとするものなのです¹⁰⁾」と指摘し、ヴェーバー自らが実存として社会的、歴史的な視野で実存に注目し、人間さらには実存について研究を深めたことを指し示す。だからこそヴェーバーの社会学は哲学とも言えるとヤスパースは主張するのである¹¹⁾。

またヤスパースによれば、哲学者とは単なる認識者以上のものである。「認識する素材とその由来とがその哲学者の特性を示しております。哲学者の人格のなかには、時代やその時代の動向やその時代の問題点といったものが現前し……哲学者はその時代の本質を代表¹²⁾」していると言うわけである。しかも彼は、ヴェーバーは「すでに彼以前に現実のものとなっていた意味での哲学者ではありませんでした。彼は哲学者という理念に一つの新たな充実を与えました。

、(草薮正夫他訳『哲学への道』以文社、1980年、156ページ)。以下、RuAと略記。

8) RuA, S. 17. 邦訳165ページ。

9) RuA, S. 17. 邦訳165ページ。

10) RuA, S. 11. 邦訳156ページ。

11) RuA, S. 12. 邦訳157ページ。

12) RuA, S. 13. 邦訳159ページ。

……彼は哲学的な実存に現代的な性格を付与した」¹³⁾ のだと言う。そして「哲学の実存なるものの本質は、絶対者の意識であり、また、絶対者の生き生きした真剣さによって担われているような、無制約性をもった行動と態度なのであります」¹⁴⁾ と彼は言い、そのような本質こそがヴェーバーに独自のものとされる。つまりスチュアート・ヒューズ (H. Stuart Hughes, 1916-) が指摘するように、彼はヴェーバーを「実存主義者の原型と見る。ヴェーバーが生涯をきた、まさしくその生き方に、人間の実存の可能性が開示されている」¹⁵⁾ と考えたのである。その意味で当時の彼にとって、ヴェーバーこそが同時代における代表的哲学者そのものであった。

以上のようなヴェーバーを哲学者と捉えるいささか乱暴とも思われるヤスパースの考え方も、彼にとって哲学とはなによりもまず人間存在解明を目指す構想、人間学的構想に立ったものであったことを考えあわせれば理解されよう。哲学とは、時代の動向、問題点を踏まえつつ人間であるところの自分自身を知ろうとする知的営みに他ならないのだ。しかも社会学者ヴェーバーを哲学者とし、ヴェーバーに現代の実存を把握しようとする姿を見るということは、彼における人間存在解明とは単なる思弁的なものではなく、実際に社会の中で生活を営む人間存在の解明を目指すものであったことが伺える。

III 現象学、新カント派批判

ヤスパースの同時代人には、現象学の巨匠フッサールがいる。フッサールは1900、1901年『論理学研究』(*Logische Untersuchungen*)を著し、自らの哲学である現象学を世に送り出した。彼の現象学とは、古代ギリシャ以降の哲学的伝統を継承しつつも、近代を果敢に主題としてそこに潜む問題点を学的に的確

13) RuA, S. 23. 邦訳175ページ。

14) RuA, S. 23. 邦訳175ページ。

15) スチュアート・ヒューズ、生松敬三・荒川幾男訳『意識と社会』みすず書房、1965年、226ページ。(H. Stuart Hughes, *Consciousness and Society—The Reorientation of European Social Thought 1890-1930*, New York, Alfred A. Knopf, 1958)。

に際立たせた20世紀前半における新たな哲学的展開であった。しかもそれは彼個人にとどまらず、シェーラー (Max Scheler, 1874-1928)、ハイデッガー (Martin Heidegger, 1889-1976) らに引き継がれ、さらに第二次大戦後は国を越えてサルトル (Jean-Paul Sartre, 1905-1980)、メルロ・ポンティ (Maurice Merleau-Ponty, 1908-1961) らによりフランスにも広がりを見せた。つまりそれは現象学運動 (phenomenological movement) として思想界の大きな潮流を形成することとなったのである。しかもその運動の分野たるや哲学にとどまらず心理学、精神医学、社会学、言語学にまで広がりを見せた。現象学の影響の大きさと重要性は、そこからも確認されよう。

現代という科学技術の時代において形而上学を可能とするような哲学の構築、そのような観点から言えば、現象学こそ、21世紀に突入した今日においてもなお最も重要な哲学的潮流の一つであり、そこに我々は、新たな、そして重要な哲学的展開をみる。現象学の重要性が今日においても変わることのない中で、フッサールと同時代にありながらも現象学を深く問題とすることなく独自の実存哲学を展開したヤスパーズに対して、関心が薄らぐのも当然かもしれない。しかもその精神医学者あがりという経歴が災いして、現象学の重要性を捉え切れなかった「素人哲学者」という印象がここにおいても一層強められるだろう。そのような漠然とした印象の下にあってヤスパーズ哲学は、今日その大きな潮流の影に隠れ置き去りにされてしまった観がある。

しかし哲学者ヤスパーズが、現象学と同時代にあって形而上学の構築を同様に目指しながらも、現象学に無関心にその潮流に乗ることがなかったのは、単にその重要性を捉え切れなかったからというだけではない。前述のとおり彼は元来、独自の人間学的構想に立ち哲学構築に集中してきた精神医学的哲学者であった。したがって精神医学者ヤスパーズにまで考慮を拡げるならば、彼と現象学との関わりについての事情も全く異なってくる。精神医学の分野においてすでに彼は、自分なりにではあるが現象学を考察しその重要性を認識していたからである。

つまり精神医学者ヤスパースは、現象学に対して無関心であるどころか、実は精神医学の分野において誰よりも早く現象学運動の一翼を担っていた。後に実存哲学者となる彼は、当時の哲学的潮流、現象学を独自に学びそれを自らの精神医学にすでに応用していたのだ。しかもそれこそが、現象学を用いる精神医学史上最初の第一歩であったのだから、その学際的な着眼点は驚きである。彼が精神医学に最初に現象学を持ち込み、精神医学史上初めて人間理解における方法について学的に問題提起したのである。だからこそその後現象学を精神医学に本格的に方法として導入した精神医学者ビンスワンガー (Ludwig Binswanger, 1881-1966) でさえ、彼に対して惜しめない讃辞を贈ったのである¹⁶⁾。

また当時においても精神医学者ヤスパースにある現象学的方法は、前稿で見たようにニッスルにも注目され¹⁷⁾、さらに驚くべきことには以下のようにフッサール本人にも注目され支持されていた。彼によれば1913年、ゲッティンゲンに滞在している彼をフッサールは自宅へ招き歓迎した。しかもそこで彼は、フッサールに弟子として扱われ、「あなたは、あなたの論文において立派に現象学を駆使しています。あなたがすでに現象学を正しく実行しているかぎり、あなたは現象学とは何ぞやということを知る必要はないのです。あなたはそれを続けていけばよいのです」¹⁸⁾と言われたのだ。多分、当時彼が著しはじめた

16) ビンスワンガーがヤスパースについて、「彼は方法的論議を私たちの領域に導入した最初の人物である以上、私たちは精神医学の方法論的問題をとりあつかう場合にはいつでもふかい感謝の念をもってヤスパースを思い浮かべないわけにいかないのです……強調しておきたいのは、彼の見解をそのように批判し形成しなすからといって精神医学への彼の功績がけっしてせばめられてはならないし、またそんなことはできもしないということです。事情はまさに反対なのです！」(L. ビンスワンガー、荻野恒一他訳『現象学的人間学』みすず書房、1967年、68-69ページ。Ludwig Binswanger, *Ausgewählte Vorträge und Aufsätze Band I Zur Phänomenologischen Anthropologie*, Bern, Francke, 1947.) と言っているとおりである。

17) ヤスパースが論文「精神病理学における現象学的研究方向」(*Die phänomenologische Forschungsrichtung in der Psychopathologie*, 1912) を発表した際、ニッスルは「外来診療室へ入ってきて、私が現象学的に診察する際に傍聴していてよろしいかを私に尋ねにまいりました。幸い私は、初期精神分裂病を手掛かりに、若干のことを明瞭に示すことができました。ニッスルは非常に満足の体で、現象学を用いてとにかく相当のことができるね、といいました」(PA, S. 29. 邦訳38ページ。)とヤスパースが言うとおりである。

18) RuA, S. 328. 邦訳14ページ。

現象学的な論文、たとえば「精神病理学における現象学的研究方向」(Die phänomenologische Forschungsrichtung in der Psychopathologie, 1912)などをフッサールは読み知っていたのであろう。このように彼は、フッサールから直々に現象学者として認められ高い評価を受けたと言う。したがって彼が、精神医学と現象学との接点を見出したことをきっかけとして現象学へと、つまりは哲学へと専門を転じてさらなる歩みを進めたというならば話しは簡単であった。が事実は全く異なっていた。驚くべきことに精神医学者ヤスパースは、フッサールからの「現象学者」という好意的なお墨付きを受け入れなかったのだ。

ヤスパースはあくまでも精神医学に現象学を導入した精神医学者である。フッサールの現象学を彼は確かに、科学の一分野、精神医学の分野において人間を問う理解するためには有益なものであると考えそれを自らの研究に応用した。したがって彼は、現象学を精神医学という科学の領域における研究や治療に応用することには吝かではなかった。しかも現象学を用いると言っても、それは科学の分野における方法論的手法であった。藤森英之の言葉を借りるならば、彼にある現象学的方法とは、「ここではもはや哲学的なものではなく科学的な方法である。……つまりヤスパースの意味での現象学は純粋に『静的了解』」¹⁹⁾なのであった。したがってそれは純粋に現象学的方法とは言えないものであった。そのような研究や治療が現象学という哲学の駆使として理解され、自らが現象学を旨とする哲学者とまで評されることに彼が消極的であり抵抗を感じたのは当然であろう。現象学を正確に把握し応用できていなかった以上、肝心の哲学としての現象学もまた、精神医学者である彼においては、根本的に理解されていなかったのだ。しかもその一方で、1913年当時『精神病理学原論』を著し、一躍精神医学界で脚光を浴びたヤスパースは、すでにその頃独自に哲学についてしっかりとした考えを確立していた。現象学を独自に学び、ま

19) ヤスパース、藤森英之訳『精神病理学研究』みすず書房、1971年、383ページ、藤森英之記「訳者あとがき」。

たフッサールに会った1913年頃に、まさに彼にとって「本来の科学と哲学との間にはいかにはなはだしい相違があるかということが明瞭になってきた」²⁰⁾と言うのだ。単に彼にある哲学的素養の欠如と言うよりはそのような彼独自の哲学観の確立が、現象学への理解と評価をはばんだのであろう。彼は、フッサールに対して反抗気味に「現象学とは本来いかなるものであるかということが私には明確ではない」と不満を述べた²¹⁾。

つまり彼にとって、フッサールが「行ったことは、『視ること』の身振りであり、視られたものが何であるかということについては彼はほとんど無関心でした。彼は1910年に『厳密科学としての哲学』についての論文を『ロゴス』に発表しました。この論文は、理路整然たる帰結に到達しているという点においてもまた傑作であることには違いないのですが、しかし私から見れば、彼が哲学を科学に顛倒していることは明らかであり、このことが私の不満を駆り立てました」²²⁾と言うのである。またザーナーによれば、彼にとってフッサールとは、「哲学を学へと逆倒させた権化であり、『見るという態度』を実行しつつ、その実たいていはただどうでもよいものしか見なかった人物」²³⁾なのであった。またさらには「現象学を哲学だとすることは、哲学の根本精神から言って非難されるべきことであるように思われた」のであり、「哲学することにおいては、私たちは科学の場合と同様に、あたかも見物人 (Zuschauer) であるかのような態度で現象を見ることによって前進するのではなくて、同時に内的行為であるような思惟によってのみ前進するのである」²⁴⁾と彼は言う。彼にとって哲学

20) RuA, S. 328. 邦訳15ページ。

21) RuA, S. 328. 邦訳14ページ。

22) RuA, S. 327-328. 邦訳14ページ。

23) Herausgegeben von Walter Biemel und Hans Saner, *Martin Heidegger/Karl Jaspers Briefwechsel 1920-1963*, Serie Piper 1260 (R. Piper & Co. Verlag), München, 1990, S. 251-252. (渡辺二郎訳『ハイデッガー＝ヤスバース往復書簡』名古屋大学出版会, 1994年, 383ページ, 注86(2))。以下, HJと略記。なおザーナーは、ヤスバースにおいてフッサールは、「従来まで見られなかった物事を事物に即して見ることを可能にした精密な分析の道具を作り、『見るという動作を行った。』しかし彼が見たものは、哲学的には取るにたならなかった。ここには、実存的に重大なものに対する目が欠けていた」とも言っている。(J, S. 33. 邦訳38ページ。)

24) RuA, S. 328. 邦訳15ページ。

とは、すべて根本的には形而上学であるかもしくは、形而上学に直接関係しているものである。しかしフッサールの哲学においては全くそれが理解されていないと彼は考えたのだ²⁵⁾。

フッサールに続く現象学者、シェーラーやハイデッガーに対するヤスバースの見解についてもここで少し考察しておこう。たとえば彼はシェーラーについて、1922年11月24日、ハイデッガーへの手紙のなかで次のように言う。「あのシェーラーの書物を……私はざっと読みました。私は、私の歴史に関する講義のなかで、ほとんどそれと合致する形で、多くの判断を下しました。シェーラーは、少なからぬ事柄を、正鵠^{せいこく}を射た形で、見ています。けれども、全体として、シェーラーは、私には表面的に思えます。——その論究技法の点ではありません。それは大したことではありません。むしろ、生き方においてです。シェーラーは水準の差を知りません。シェーラーは結局すべてをどろどろに煮て一緒くたにしてかきまぜているのです。それでいてその際シェーラーは、私の思うには、度々、優れて現代的な諸課題を定式化しさえするのです。いずれにしても、それは世間向きの読める本です。それだけで大したものです」²⁶⁾と。またそのシェーラーは1928年5月19日フランクフルト大学に招聘された直後に他界するのであるが、その彼に代わってフランクフルト大学で講義をしたのはヤスバースその人であった。そのシェーラー亡き後の1928年6月4日に彼は、実際には発送しなかったと思われるハイデッガー宛ての手紙²⁷⁾の中で、シェーラーについて以下のように言っている。「シェーラーは『いい奴』でし

25) ヤスバースは以下のようにいう。「マーンケのその書評は、……あのデイルタイとフッサールの二人が全く知りもしなかった面を、射当てていません。つまりはその面とは、根本的にすべては形而上学なのであり、もしくはすべては形而上学と直接関係しているのだということ、これなのです」(HJ, S. 84-85. 邦訳119-120ページ)と。

26) HJ, S. 36-37. 邦訳38-39ページ。

なおここにおいてヤスバースが「あのシェーラーの書物を……私はざっと読みました」というところの書物とは、おそらく論文『現代のドイツ哲学』のことであろう。(HJ, S. 227, Anmerkungen 12 (7). 邦訳360ページ, 注12 (7) 参照)。

27) 「この手紙は、ハイデッガーの遺書のなかには存在していないので、十中八、九、発送されなかったであろう」という。(HJ, S. 245. 邦訳377ページ, 注65 (1))。

た。シェラーの明敏さとその『精神性』は、なにはともあれ、今日かけがえないものとして、尊重されざるをえませんでした。私はまた『公的』にも……シェラーについてはとやかく言わせないうもりです。けれどもシェラーは、私に道を照らしてくれたような光ではありませんでした。——彼はむしろ、鬼火でした」²⁸⁾と。

さらにヤスパースは、ハイデッガーに対しても手厳しい。両者は、『世界観の心理学』が出版された時、1919年頃に知りあったと考えられる²⁹⁾。その後彼はハイデッガーとの交友関係を結び数年間活発に交際した。その際ハイデッガーは、病弱な彼に配慮したのであろう、自分の方が行動しやすいとしばしばハイデルベルクに彼を訪ねた³⁰⁾。しかしその交際の過程で、互いに目指す哲学が異なっていることが徐々に露呈してゆく結果となった。彼はハイデッガーの『存在と時間』(Sein und Zeit, 1927)について、「文章の力強さや概念の構成力やしばしばひらめいている新しい語法的確さによってただちに感銘をあたえるだけの著作」であると評価しつつも、「私が哲学の道で求めているものにとってはやはり不毛なもの」だと言う³¹⁾。またこの書物に「対抗して自分の思惟を進めねばならぬもの、それと対決せねばならぬようなものとも思いません。ハイデッガーとの対話の場合とは違って、彼のこの書物からは衝撃を受けることがなかったのです」³²⁾と彼は言うのである。

その一方で1916年ハイデルベルク大学哲学部心理学講師から員外教授となったヤスパースは、同じ年に他界した哲学教授ヴィンデルバントの後任としてハイデルベルク大学に招かれた新カント派リッケルトと1936年まで議論を重ねた。若い人との議論を喜びとするリッケルトは、彼と遠慮なく無礼講で議論を幾度

28) HJ, S. 98-99. 邦訳143-144ページ。

29) PA, S. 95. (草叢正夫他訳『哲学への道』以文社, 1980年, 183ページ)。なお「ハイデガーのこと」は、『哲学への道』にその邦訳がある。

30) PA, S. 93. 邦訳181ページ。

31) PA, S. 98. 邦訳189ページ。

32) PA, S. 98-99. 邦訳189ページ。

も闘わせた³³⁾。

その議論の中で両者が厳しく対立する以下のエピソードも興味深い。リッケルトは、1919年彼の『世界観の心理学』の校正刷に《価値体系》の構想のいくつかの実例として、ミュンスターベルヒ、シェーラー、リッケルトを並べて引用している注を取り消すように彼に求めた。彼はその抗議に従い訂正した³⁴⁾。また1920年彼は、ヴェーバー亡き五日後にリッケルトを訪ねたが、その際のリッケルトの言動から彼はリッケルトへの失望を決定的なものとした。というのはその時リッケルトは、亡くなったばかりのヴェーバーを今や自らの弟子として語り、彼の著作は悲劇的なほど崩壊していると彼に強調したからである。リッケルトのヴェーバーに対するこのような敬意のなさとは不当な評価に対し彼は、激怒してリッケルトに対して、「あなたはご自分の哲学に関して、とにかく今後もひとに知られるとお考えになっているのであれば、それはマックス・ヴェーバーが自分の著作の叙述に付したある註の中で、理論的見解に関して負うところありと認めた人物として、あなたの名が出てくるからであり、ただそれだけです³⁵⁾」と言い放った。この時点から、彼とリッケルトとの決別が決定的となった。同僚であり哲学上の大先輩であるリッケルトに対し面と向かって批判したのだから彼は誠に融通の利かない人物であるが、それも彼の誠実さの帰結と見なせよう。

しかしこのような二つのエピソードにもかかわらず、ヤスパーズは前述のとおり1936年までリッケルトとは議論を重ねた。その中でも特に1922年までの数年間の議論において、ヤスパーズ自身の思索の展開上、ひとつの問題が何ものにもまさって重大なものとなって浮び上ってきた³⁶⁾。というのはその議論の

33) ヤスパーズは、「ヴィンデルバルトの死後、1916年リッケルトが哲学正教授としてハイデルベルクに招かれました。私は1936年までの長い年月を、初めのうちは私講師として、1921年以降は同僚として、同じ大学で彼といっしょに講義する身となりました。彼が赴任したとき、私は心理学の私講師でありました。彼は若いひととの談話を喜びとしました。われわれはしばしば顔を合わせては、忌憚なく議論を闘わせました」と言うのである。(PA, S. 35. 邦訳48ページ)。

34) PA, S. 35. 邦訳49ページ。

35) PA, S. 38. 邦訳53-54ページ。

36) つまりヤスパーズは、「1922年までの数年間にわたるリッケルトとの頻回の談合におきまし

中で彼は、リッケルトの哲学に異議を唱え、「物理学者が自分の思弁をリアルに検証する場合、実際に何ごとかを認識するのに反して、彼の方はといえば、全体としてシャボン玉のように空しい、精細な論理を展開しているだけだ」³⁷⁾と確信するにいたる。また彼はリッケルトの「その科学的要求に関して攻撃を加え、彼の主張、少なくとも彼の『価値体系』において主張している物事は、決してどのひとにも必然的に妥当するものではないと論じ」³⁸⁾、また「科学的認識ならば与えられてしかるべき、ひとつの普遍的な見解の一致を決して得られるものではない、ということを強調した」³⁹⁾のであった。そして彼は、哲学は「科学の知らざる真理要求を満足させるべきものであり、科学の関知せざる責任に立脚し、およそ科学が到達しえざる何ごとかを成しとげるもの」⁴⁰⁾であることを再確認するのである。そのような哲学観にある彼にとってリッケルトは、「元来決して哲学者なのではなく、物理学者であるかのように哲学に従事している」人物であり⁴¹⁾、やはり観察者の立場で論じていると見なされたフッサールと同様に哲学者ではないとされた。つまりリッケルトのような「職業哲学者たる教授連が説く講壇哲学は、決して本来の哲学ではなく、科学たろうとの要求をもってする、われわれの生きることにとって重要ならざる物事の論究に、例外なく尽きるもの」⁴²⁾だと彼は考えるにいたるのである。

IV 科学から哲学への内実

哲学に対して自らに独自の哲学観をもち、そこに人間存在の解明という大きな期待、構想を抱き、それへと研究を広げ転じていくヤスパースが、他の同時代の哲学者と哲学に自らの求めるところの哲学の先駆を期待し関心を向けたの

ゝて、私の思索の展開にとって、ひとつの問題が何ものにもまさって重大でありました」と言うのである。(Ebenda, S. 35-36. 邦訳49ページ)。

37) PA, S. 36-37. 邦訳51ページ。

38) PA, S. 36. 邦訳51ページ。

39) PA, S. 36. 邦訳51ページ。

40) PA, S. 36. 邦訳51ページ。

41) PA, S. 36. 邦訳51ページ。

42) PA, S. 40. 邦訳57ページ。

は当然であった。だからこそ前節まで考察したように、彼は、社会学者ヴェーバー、現象学者フッサール、シェーラー、ハイデッガー、新カント派リッケルトらに関心を向け、難病を抱えつつも彼らと可能な限り積極的に議論を重ねた。しかしそこでのフッサールやリッケルトらの哲学が見物人や物理学者のような立場に立ち科学的であろうとしているという彼の有無を言わせぬ批判は、一見頭ごなしで稚拙なものに聞こえる。彼らの哲学にある非論理性など具体的な誤謬をその著作から学的に詳しく暴きだし批判するのが学者たるものの本筋だからだ。また何よりもフッサールやリッケルトの構築した哲学の中にこそ、我々にとって必要な何がしかの真理が示唆されているのかもしれないのだ。それ故に、以上のような彼の批判的態度を一笑にふすこともできる。

しかしはじめに触れまた前稿において詳しく考察したように、ヤスパースには、何よりもまず人間存在の解明を目指し精神医学者として本格的に学者の道を歩みだし、哲学へと専門を転じた経緯があった。つまり彼の精神医学者時代は、その後の哲学者時代と無縁ではなく相互につながりが認められるが故に、前者を前期とし、後者を中期、後期として考えることができるし、また、彼を精神医学的な哲学者、つまりは精神医学的哲学者であると考えることができた。しかもそのようなヤスパースの歩みの真意と意義は、人間学的構想に基づいているという視点からこそ明らかになったのであった。彼は、まずは精神医学者ニッスルの下にあって医学者として禁欲的且つ徹底的に科学的方法に立ち人間を解明しようとする学的歩みを始めた。しかし人間を普遍妥当的に厳密に解明しようとする科学者ニッスルの態度は、彼にとって科学に立脚した明晰なものであったにもかかわらず、かえって彼に人間存在解明を科学において目指すことの可能性よりもむしろその限界をはっきりと思い知らせる結果となった。人間存在の解明を第一に目指す彼にとって、科学において普遍妥当的な回答を求めるだけでは人間存在を捉えきれないということは何よりも深刻な問題であった。それ故に今や、その打開策として観察者の立場に立つ科学とは異なる哲学の可能性が大きなものとなりそれを学ぶことがさらに避け難いものとなって

いったのだ。そのような経緯の下にあってこそ彼は、初めて独自に哲学に本格的に取り組むこととなった。つまり彼は、人間学的構想に集中し研究するところに身を置いていたが故に、人間理解のための精神医学ひいては科学の限界を痛感し、独自に哲学をも研究し、ついには哲学者へと転身していくにいたったわけである。したがって彼が追究した哲学には、すでに前期から培われた、人間学的構想に基づくそのような独自の解釈が込められていたことを忘れてはならない。彼は、何よりもまず前期の精神医学研究時代に確信したそのような哲学観を転身後の中期、後期の哲学研究時代において人間学的構想に基づき具体的に活かし独自の哲学を構築していく精神医学的哲学者なのであった。

したがって同時代の哲学者に対する前節の批判もまた、彼の哲学的素養の欠如によるというよりは、なによりもまず、彼が精神医学者から転身し、獲得した「哲学者は観察者にあらず」という彼独特の哲学観に基づいたものであったことに思い至ることであろう。彼は、彼ら自身の哲学観そのものに自己の哲学観との相違と深刻な誤謬を見て取っていた。だからこそ前節において考察した彼の彼ら、すなわち自らが精神医学に最初に持ち込んだ現象学を代表するフッサールとハイデルベルク大学の同僚であり新カント派を代表するリッケルトに対する批判が、それぞれの哲学そのものの内容に対する詳細な批判に向かうまでもなく、「哲学とは何か」という根本的な哲学観をめぐる批判に終始したのである。彼の批判、つまりは、フッサールにある哲学的態度とは見物人のような態度であり、彼は哲学を科学へと逆倒させたという批判も、シェーラーに対する生き方において表面的であるという批判も、ハイデッガーの哲学に対する自らが哲学に求めているものにとっては不毛なものであり、対決しなければならないものとは思わないという批判も、またさらにはリッケルトにある物理学者のような哲学的態度への批判も、すべて彼自らが抱く哲学観からするならばそれら現象学、新カント派にある哲学の意図するところが根本的に的はずれなものであると感じられた故の批判であったのだ。つまり彼が、フッサール現象学者らやリッケルトとの議論の中で、特にフッサールに会った1913年頃、さら

にはリッケルトと議論を重ねた1922年までの数年間において問題としたのは、何よりもまず彼らの中に見物人や物理学者のような態度に立つ哲学を読み取り自らが限界を感じたはずの科学と変わらないそのような姿勢に彼らが立脚しているということであった。自己もそれであるところの人間存在の解明の可能性を哲学に見い出した彼において、彼らのそのような観察者としての他人事の態度は、科学的態度と変わることなく、そのような態度の限界を越えたところにあるはずの哲学の最も重要な利点を深刻に無視していると考えられたのだ。

だからこそヤスパースは、前述のようにたとえ精神病理学においては有益なものとして用いた現象学でさえ、彼らの哲学を形而上学ではなく科学に転倒しているとし、哲学としてはきっぱりと否定した。それは、彼が何よりもまず独自の人間学的構想に基づき確信するにいたった彼独特の哲学観に立脚するが故の「見切り」であったと言えよう。つまり彼は、人間存在解明においてもっとも危急の学問であるはずの哲学が、今や科学の隆盛の中でそのしもべとなり本来の自らの役割から離れている現状を読み取り批判し、それらを哲学ではないと見切ったのだ。だからこそヤスパースの彼らへの批判は、彼らの哲学そのものの内容にまで詳しくメスを入れることがなかった。しかも彼は、同時代の哲学へのそのような批判、見切りだけにとどまる者ではなかった。

確かに前稿で考察したようにヤスパースは、精神医学者として素晴らしい研究を成し遂げながらも難病を病む故により良き研究環境に身を置くこともできず研究者として袋小路に入ってしまったという理由のみならず、人間学的構想に基づき研究するところに初めから身を置いていたが故に、次第にその研究上哲学が避けがたく要求され、また同時代の哲学者として彼が高く支持していたヴェーバーの死に後押しされる形で、ついには自ら真の哲学へと人々を呼び覚まそうと哲学者へと転身したのであった。

したがって次第にその研究上哲学が避けがたく要求され哲学者へと転身するまでにいたらしめたのは、その人間学的構想に基づき研究するところに初めから身を置いていたのみならず、これまで考察してきたようにヴェーバーら教師

のみならず、さらにフッサールら反面教師らとの研究分野や確執を超えてなされた議論の中で、彼に確信されたところの真の哲学を世に問わねばならぬ必要性を痛感するにいたったからであった。つまり彼は、精神医学研究において、同時代の教師としてのニッスルらと議論を重ね次第に科学とは全く異なる哲学に人間学的構想上のさらなる可能性を確信していく一方で、同時代の反面教師としてのフッサールらとも議論を重ね、彼らに哲学そのものを見誤った観察者の態度に立つ哲学を見出し失望させられ、それらを哲学ではないと見切るにいたった。彼は、そこに哲学なき時代、さらには偽物の哲学が繁栄する時代を読み取り、それを打開すべく、自らの無力を承知しつつも精神医学から哲学へと本格的に専門を転じ、自らが言うところの真の哲学構築へとひたすら集中していったのである。

つまりヤスバースは、「マックス・ヴェーバーはすでに世を去っておりまして。精神の世界において哲学というものが途絶えているとすれば、せめて哲学の何たるかを立証し、偉大な哲学者へとまなざしを向けさせ、もろもろの混同を防ぎ、若いひとびとに本当の哲学への自覚を促すということ、これが任務であります」⁴³⁾と考えた。また彼は「ところで現在の大学には本当の哲学というものが存在しないのではないかという考えが私を支配するようになるに従って、私は次のように考えました。いまや哲学の真空状態に直面して、たとえ力のない者でも、自分で一つの哲学を産み出す能力はなくとも、哲学について告知する権利、すなわち過去において哲学は何であったか、また将来何でありうるか、ということを語る権利はあるのだと。そのときはじめて——四十近くになって——私は哲学を自分の一生の使命とした」⁴⁴⁾と言うのだ。人間学的構想にあって人間をひたすら見極めようとする彼は、学的に魅力あるフッサールの現象学、リッケルトの新カント派の哲学との対峙の中で、その構想に基づく自らに独自の哲学観を一層明確に自覚し、それに基づく真の哲学を希求するにいたったわ

43) PA, S. 40. 邦訳57-58ページ。

44) RuA, S. 335. 邦訳24ページ。

けた。したがって彼の開かれた態度とそれに応じて彼と議論を重ねた彼ら教師や反面教師としての学者らの存在も、彼を転身へと向わせ、独自の哲学構築へといたらしめた大きな要因であったと言えよう。人間学的構想に立つ彼にとって哲学とは、人間存在解明を目指すものであったが、その彼にとっての「真の哲学」が以上の様な教師、反面教師らとの関わりの中で多くの示唆を受け、どのように明確に捉えられていくこととなったかを考察し、その真意と意義を考えてみたい。

V ま と め

——ヤスパース哲学とは——

これまで考察してきたように、ヤスパースにおいて哲学とは、何よりもまず観察者、「見物人 (Zuschauer)」の態度に立つ科学とは厳しく峻別されるものであった。というのは、科学は観察者の立場に立って物的対象を機械論的に解明するものであるが、我々自身であるところの人間存在の解明に対しそれは限界があった。したがって彼においては、観察者の態度に立つ科学の限界を超える哲学にこそ、人間存在解明への新たな可能性が期待されたのだ。彼の構想に基づくそのような哲学観を理解しなければ、彼がなぜ科学にあるような観察者の態度に立つ哲学を致命的であると批判し、独自の哲学構築へといったかが判然としない。

しかもヤスパースに独自のそのような哲学観は、精神医学研究時代、前期ヤスパースにおいて、彼が人間学的構想に基づき科学者として研究に徹し、また前述の教師、反面教師らとの議論の中から際立たせられた彼の確信なのであった。そこに精神医学的哲学者としての彼の姿が伺える。つまり科学にあっては、彼自身がニッスルの精神医学研究に学んだように、体因性という見地から「観察者」としていわば岸にあって病におぼれる患者をあくまで他人事さらには単なる物質として捉え、客観的にそれを分析しなければならない。そのことに精神医学研究上、人間学的構想に立ち精神医学者、精神科医として疑問を呈した

のだ。そこには彼自身が、医師として観察者の立場に立ちながらも、同時に難病を抱え患う患者として観察される側の立場にも立たざるをえなかったことが大きかったのではないだろうか。彼は患者を診察する医者であると同時に、診察される患者でもあったのだ。しかも不幸なことに彼は、気管支拡張症と二次的心不全という難病故に死を常に意識しなければならない危機的状況に追い込まれていた。したがって精神科医として患者として、日夜病んだ人間存在に臨床の場で触れつつ人間学的構想を練っていた彼においては、他の人間諸個人同様自分自身も現実の人生においては溺れているも同じ深刻な危機的状況にあるという意識が根強く先行していたに違いない。そのような事情から自らもそれであるところの人間存在解明を目指す構想に立ち人間について研究せざるを得ない彼にあっては、対岸にあるかの如くに他人事のように観察者の立場に立って眺め論じることだけに留まることは赦されなかった。精神医学者ヤスパースは、自らの難病と精神病疾患に苦しむ患者とに関わりつつ人間学的構想へと情熱を傾ける中で、すでに単なる物質では割りきれない自他諸個人にある人間存在の特殊性をどのように理解すべきか、科学の領域に身を置きながらも水に飛び込むが如くに自分自身で試し実践するところまで研究の射程に入れジレンマに陥っていたのだ。したがってここにおいて彼は、教師や反面教師といった同時代の学者らのみならず、患者としての自らとも対峙し議論を重ね研究の糧としていたと言いえよう。

つまりヤスパースは、前期の精神病理学研究においてすでに「抽象の域を脱しない論理的な論議はおこなうべからず、ということを目標に」⁴⁵⁾していた。また、「古い諺どおり、岸にいて泳ぎを論じては進歩はありません。われわれは水に飛び込まねばならぬ」⁴⁶⁾と抽象性を排し具体性と事実性を重視していた⁴⁷⁾。それは病気を診て患者を診ないのではなく、人間である患者を診てそこ

45) PA, S. 26. 邦訳33ページ。

46) PA, S. 26. 邦訳33ページ。

47) 『精神病理学原論』の「経験的な基本態度は、何ごとかを精神病理学的認識として承認するための制約は、あくまで具体性と事実性であることを要求いたしました」(RuA, S. 26. 邦訳ノ

にある具体的な病状を了解しようとする人間的存在全体への目差へとつながろう。その様な姿勢からこそ、「そもそも全体としての人間なるものは、対象として把握できる可能性をことごとく越えたところにあるのです。人間は存在者として自己自身にとっても、認識対象として研究者にとっても、完結不能であります。人間とはいわば、あくまでも開かれた存在者であります。人間とはとにかく、彼が自分について知っている以上、又知りうる以上のもの」⁴⁸⁾と前期ヤスパースにあっては確信されていたのである。

また前述のとおりヤスパースには、フッサールに会った1913年頃、前述した科学と哲学の相違が明確になってきた。つまり科学は否みがたい普遍妥当的な知識に到達するのであるが、「常に個別的なものにおいて、何らかの特殊な方法をもって、一定の前提のもとで、特殊な対象に向けられるという犠牲を払わねば」⁴⁹⁾ならない。しかし哲学は逆にそのような普遍妥当的な知識に到達することがないという犠牲を払うが、「生の根拠を、すなわち私自身がそれであり、それであることを欲するところのもの、限界において感得可能になるものを、開明」⁵⁰⁾する。彼は、人間一般を諸物として問題とする科学的な立場の限界を悟るとともに次第に人間諸個人そのものをその全体性において問題とする科学を超えた哲学的な立場に目を向ける。いわば科学という「普遍妥当的な知識で理解可能な人間存在一般の解明を目指す」立場の限界から、哲学という「普遍妥当的な知識では理解不可能な諸個人の人間存在の解明を目指す」立場へ移行していくのである。そこには「哲学とは、科学の知られざる真理要求を満足させるべきものであり、科学の関知せざる責任に立脚し、およそ科学が到達しえないなにごとかを成し遂げるもの」⁵¹⁾であるという彼の確信があった。そして彼はついに後者にあって、人間一般に還元できない自他であるところの人間諸

、33ページ。)と言うのである。

48) PA, S. 25. 邦訳31-32ページ。

49) RuA, S. 328. 邦訳15ページ。

50) RuA, S. 328. 邦訳15ページ。

51) PA, S. 36. 邦訳51ページ。

個人の解明へと向かうのであった。彼は、以上のように研究の初めから診る医師、診られる患者の両方に身を置く立場にあって自分自身をも含めた個として生きている実際の人間存在の解明を目論んだ故に、単に岸に立つ観察者ではなく、泳ぎ手の立場に立ち、同時代の観察者の立場に立つ哲学を批判しつつ、独自の哲学構築へといたるべく哲学研究への転じざるを得なかったわけである。

したがって人間諸個人を人間一般において論じる科学から抜け出し哲学へと転じてきたヤスパースにおいては、哲学が科学の如くに人間諸個人を人間一般にすりかえて論じることは許されようもなかった。我々は、そこにおいては対象を眺める観察者ではもはやありえず、むしろ自分自身という人間存在のうちにあって哲学し自らを解明しなければならない。哲学者は溺れている泳ぎ手の如くに悲惨な人間存在である自らに対して、まさに観察者ではなく飛び込んでその本来の自己と同一の泳ぎ手となり哲学しなければならないのである。彼が自らの著作『哲学』(*Philosophie*, 1932)⁵²⁾について、その「内実は、体系的な根本思想のうちにあるのではなく、むしろそれによって何が生起するかということのうちにある」⁵³⁾と言う通りである。また「体系性をもった私の精神病理学が対象論的でなくて方法論的であったのと同様に、私のその後の哲学する思惟は存在論的 (ontologisch) ではなくて、内面探究的 (eindringend) であります。換言しますと、それは存在するものが何であるかを知るものではなくて、包括者を開明するものなのです。重点は特殊な内実と展開とのうちに存している」⁵⁴⁾のである。彼における哲学することとは、自らにおける実践と展開そのものである。哲学することにおいては、「私たちは科学の場合と同様に、あたかも観察者であるかのような態度で現象を見ることによって前進するのではなくて、同時に内的行為であるような思惟によってのみ前進する」⁵⁵⁾のである。

52) Karl Jaspers, *Philosophie I, II, III*, Berlin・Heidelberg, Springer-Verlag, 1932.

53) RuA, S. 363. 邦訳65ページ。

54) RuA, S. 363. 邦訳65ページ。

55) RuA, S. 328. 邦訳15ページ。

したがって哲学的真理の本質は生活実践のうちに示される⁵⁶⁾と彼は言う。哲学的省察というものは、「局外者の態度で或る対象について研究するといった、どうしてもよいような思惟ではない」⁵⁷⁾、「私がそれによって存在と自分自身へと到達するような一種の実行」⁵⁸⁾なのである。

またさらにヤスバースにとって本来哲学することとは、「現実の世界にあって人びととともに生きることなしには、すなわち何事かを行うことなし」⁵⁹⁾には為しえないものだ。また彼は言う、「私が望んだのは、個々の貴人たちの秘教めいた関心事としての『哲学すること』ではなく、人間たる限りのどの人間にも親しみやすく納得がゆく『哲学すること』であります。むしろ私はいわば路上の人間として、路上の人間とともに語りたいと思う」⁶⁰⁾と。そして哲学とは抽象的な思惟の道ではなく、「真理を、私たちの生活の意義と目標を、示してくれるに相違ない」⁶¹⁾ものであり、それに対して「哲学の代用品とは所詮、現に生きている自己自身を理解すべしという厳密な要請からの、逃避にほかならなかった」⁶²⁾のである。以上の彼の言葉からも、彼の目指すところの人間存在解明とは、常に実際にここで生きている人間に向けられていたことが理解されよう。だからこそ彼にとって当時の時の哲学者新カント派リッケルトら、「職業哲学者たる教授連が説く講壇哲学は、決して本来の哲学ではなく、科学たろうとの要求をもってする、われわれの生きることにとって重要ならざる物事の論究に、例外なく尽きるもの」⁶³⁾とされたのである。またその一方で、ヴェーバーが目指したような自らもそれ自身である、現実の社会、歴史を研究し、ひいてはその中で生きる人間諸個人を解明し、我々自身を知ろうとする試

56) ヤスバースにおいて哲学することとは、「私の生活実践のうちにその結果をもち、生活実践のうちにその真理の本質を示すもの」(RuA, S. 328. 邦訳15ページ)なのである。

57) RuA, S. 341. 邦訳33ページ。

58) RuA, S. 341. 邦訳33ページ。

59) RuA, S. 325. 邦訳10ページ。

60) PA, S. 126. 邦訳165-166ページ。

61) RuA, S. 325. 邦訳10ページ。

62) PA, S. 41. 邦訳58ページ。

63) PA, S. 40. 邦訳57-58ページ。

みもまた今日における哲学の責務の一つなのであった。彼は、そのような実際に生きる人間諸個人の人間存在の解明を哲学研究上において目指すが故に、ついには人間諸個人が自らの理性にあって自らの人間存在解明へと迫る「実存哲学」(Existenzphilosophie) 構築へといたった。

以上のような端的に現実の人間に目を向けそれを解明しようとする人間学的構想にある彼の哲学に、我々は、他の同時代の哲学を軽視し、人間学的な哲学構築へとひたすら集中し、さらにつけ加えるなら短絡的に形而上学という回答を見い出した臨床哲学的な短所を見逃すことはできない。我々は、彼の哲学にのみとどまることはできないし、彼のように彼の同時代の哲学を否定し見切ることはできない。しかしその一方で、難病を患いながらも人間学的構想に基づき精神医学研究に没頭し、そこにおいて科学の限界と哲学の必要性を痛感するにいたり、さらには、精神医学研究で培われた科学観、哲学観を具体的に哲学研究に転じて活かし、独自の哲学を構築するにいたった精神医学的哲学者ヤスパースの学的探究心に学ぶことは多い。また時代が要請し科学から哲学へといたったヤスパース哲学にある今日的意義も軽視しがたい。自らの死の恐怖におののきながらも、自分自身、人間を見つめ続けた者の真の哲学的内実がそこには確かにあるからだ。死の淵に立たされつつ、自分自身であるところの人間存在を問う中から科学の限界を見極めた一医学者が哲学者へとハイデルベルク大学を舞台に共感を得て轉身し、自らに独自の哲学を構築するにいたったのだ。その実存哲学が、20世紀ドイツ哲学に一石を投じ、そこに新たな息吹を吹き込んだことは確かだ。それは単なる「哲学の哲学」である前にまさに優れて独創的な「人間の哲学」であった。科学か哲学かという二元論ではない、また思弁にとどまることなく自らの人間存在解明も視野に入れ自ら思索する者(Selbstdenker)の哲学的深まりが、彼の歩みからも同時代の哲学者らと同様に、彼の内にも見て取れることを我々は忘れないでいたい。